

斎種蒔く 新墾の小田を 求めむと

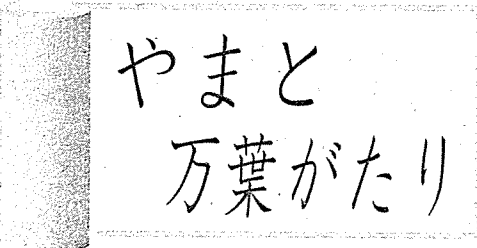
足結ひ出で濡れぬ この川の瀬に

作者未詳(巻七・一一一〇)

毎年2月第一日曜日には、飛鳥坐神社でオンタ祭が行われます。戦前は旧暦の1月11日に行われたというこのお祭りは、夫婦和合の様子を演じる奇祭として有名です。この祭礼では、田起こしから田植えまでの所作も行われることから、五穀豊穡を願う農耕儀礼に淵源を持つことがわかります。

古くさかのぼるのはわかりませんが、農耕儀礼はもちろん古代にも行われていました。古代の民間における農耕儀礼の一つが、春時祭田という祭礼です。これは、「大宝令」や「養老令」という古代の行政法などに記録されたもので、村のお社に村人たちが集まって飲食を共にする様子が伝えられています。

この春時祭田は、2月



(旧暦)に行われるという説があり、農作業を始めるにあたって村の苗代の水源を祀る祭礼だったのではないかととも言われています。

オンタ祭の本来の時期とはややずれるため直接の関係はないはずですが、豊穣を祈る農耕儀礼という点では共通しています。

今回で紹介する歌

は、春時祭田を考える時に私がいつも一緒に思い出す歌です。この歌には、神聖な種を播くための新墾田を探しに出かけたが、川の瀬に衣服を濡らしてしまっただけで、新しい様子が詠まれています。新たな農地を探す苦勞を詠み始めに際して行なわれた春時祭田を連想してしまいます。もしかすると、村ごとのお社で清められた種や苗が村人に分け与えられ、それによって種播きや田植えがなされてきたのかもしれない。種や苗を神聖視するという、古代の人々が農作物に込めた祈りの一端を垣間見られるようで、興味深い一首です。

(奈良万葉文化館研究員・吉原啓)

|| 原則、隔週掲載

【訳】清浄な種を播くべき新墾の田を探そうとして、足結いをして家を出、濡れたことだ、この川の瀬に。

れた春時祭田を連想してしまいます。もしかすると、村ごとのお社で清められた種や苗が村人に分け与えられ、それによって種播きや田植えがなされてきたのかもしれない。種や苗を神聖視するという、古代の人々が農作物に込めた祈りの一端を垣間見られるようで、興味深い一首です。

